

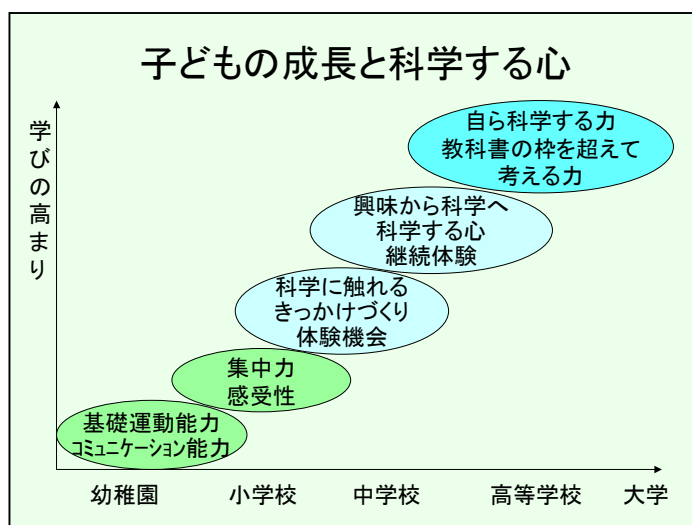
2. わくプロの経緯

(1) これまでの経緯

- 平成14年 2月 マツダ財団から広島大学(大学情報サービス室)に、子どもの健全育成と科学技術の振興の複合事業について連携の可能性の打診。
- 平成14年3～5月 広島大学で学内調整等
- 平成14年 6月 幼小中高校と広島大学の教員、科学館館長等18名による、子どもの科学教育についての検討ワーキンググループ発足。
- 平成14年11月 計5回延べ22時間にわたる議論を経て、ワーキンググループによる中間報告取りまとめ。
- 平成15年 3月 マツダ財団理事会でわくプロ事業実施の決定。
- 平成15年3月26日 マツダ財団渡辺理事長と広島大学牟田学長が会談し、わくプロ事業についての連携実施に合意。
- 平成15年 4月 広島大学の新制度である「プロジェクト研究センター」の一つとして、「科学わくわくプロジェクト研究センター」の設置。
- 平成15年8月8日 第1回サイエンスレクチャー開催 (8/8)
- 平成15年 8月 わくプロのロゴマーク決定
- 平成15年10月 第1回ジュニア科学塾開催 (10/11, 10/25, 11/8, 11/22)
- 平成15年12月 中四国地区大学の地域貢献シンポジウムで事例発表
- 平成16年 5月 小学理科ネットの本格運用開始。
- 平成16年 8月 第2回サイエンスレクチャー開催 (8/5)
- 平成16年 8月 第1回科学塾開催 (8/17-19, 9/11)
- 平成16年 8月 第2回ジュニア科学塾開催 (8/26-28, 9/4)
- 平成17年 1月 第1回わくプロシンポジウム開催

(2) わくプロ・ワーキンググループ報告書の要旨

- 現状と問題点
 - ・子どもの体験機会の不足
 - ・興味だけで終わってしまい発展性がない
 - ・教員のネットワーク、研修機会の不足
 - ・教育カリキュラムに一貫性連続性が不足、地域の教材の不足
 - ・保護者も体験不足
- 協議結果のポイント
 - ・科学の体験機会（実験や体験を通じて科学を考える機会をつくる）
 - ・興味から科学へ（現象面の裏にある真理を考えつかむ心を持たせる）
 - ・科学教育ネットワーク（科学教育のネットワークで多様な交流機会を生み出す）
 - ・保護者の参加（保護者も子どもと一緒に体験し学ぶ）



- 事業化について
 - ・成長過程に応じた事業提供
 - ・ストーリー性のある事業展開
 - ・教育側のネットワーク化
- 広島大学への期待
 - ・人的・物的資源の活用による貢献，学部横断的な協力，学生の参加，プロジェクトのコーディネート，評価と研究

(3) わくプロの基本構想

わくプロには、考えること、学ぶことにわくわくする体験、正解のない問題に取り組むブラック・ボックスをこじ開けてみる体験といった機会を継続して提供することにより、科学する心を育てていきたい、そんな願いがこもっています。

(科学の体験・興味から科学へ)

幼稚園から大学までの教員などが一緒に議論する中で、子どもの科学体験不足やものづくりの試行錯誤の機会不足などの問題点、興味を持つきっかけづくりだけではなくそれを科学する心に発展させていくことの重要性、教員の側のネットワークの必要性、保護者自身の体験不足という課題など、様々な点が指摘されました。

(21世紀を担う子どもたち)

21世紀は日本にとって手本のない時代であり、新たな世紀を担う子どもたちには、知らないことに興味を持ち新たなことを学び新鮮な感動を覚える、素直で柔軟な思考力と磨かれた理性が求められています。

いままで知らなかった現象の裏側にある原理が分かるようになる喜び、人類がこれまで築き上げてきた知の蓄積に触れる感動、学んだ知識を組み合わせながら課題を解決していくことの面白さ、そんな、わくわくする経験が大切だと考えます。

(科学する心を育てる継続的事業)

上記の議論から、広島大学の教員の協力を得て各種研究・実験施設なども活用し、科学に興味を持つ子どもたちに対して、継続的な学びの機会を提供することが提案されました。

なお、学校現場では現在既に多種多様な事業が取り組まれていることから、「わくプロ」では学校外における事業について取り組むことにしています。

(広島大学子ども科学塾など)

具体的には、広島大学サイエンスレクチャーや、小中学生を対象として継続的に実施していく広島大学子ども科学塾、その修了者を主な対象としてより高度な内容を提供する広島大学子ども志学塾などが提案されています。

このほか、科学に関する教育についての情報交換・意見交換のための情報ネットワークづくり、「わくプロ」の趣旨に沿った民間団体の事業への支援なども提案されています。

